

# What's New From ASCIKU

関西大学科学技術振興会 No.9 July 2008

## 第1回研究会を開催 6月28日(土)

平成20年度の活動テーマを「皆様方とともに祝い、これからを考える工学部創立50周年ー温故知新、新たな社会連携モデルの創造ー」に設定し、記念テーマによる研究会となります。かつて工学部で教鞭を取っておられ、幾多の有為な人材を育成戴き、工学部発展の礎を築いて戴きました先生方から往年の名講義を復活して戴き、また工学部校友の経営者が自らの体験を通しての講演を計4回計画している、第1弾です。

### 1. 「復活、迷? 講義」

「摩擦、磨耗の講義および今思うこと」 関西大学名誉教授 下間 頼一

テーブルを叩く音で始まった講義は、相対的に運動する接触面の摩擦・磨耗・潤滑などに関する学問分野のトライボロジーの語源を新約聖書に記されたユイネーギリシャ語の解説からアッシリヤの



下間先生



発火ピストンを手に下間先生



発火ピストン

巨像運搬など古代人の巨石運搬におけるトライボロジー技術など、様々な事例の紹介を基に摩擦・磨耗の奥深さに触れることができました。またベトナムで発見されたふいご系古代

技術の竹製「発火ピストン」(先生ご寄贈、関西大学博物館蔵)の実物による摩擦を利用した道具が紹介され、それが内燃機関に展開したことを熱く語られました。

次から次と溢れ出る話題と最後まで凛とした姿勢は、今年度から参加の大学院生・学生を始め、出席者一同深く感銘しました。

### 2. 「校友が語る技術開発」

(1) 大阪冶金興業株式会社 代表取締役社長 寺内 俊太郎 (昭41 学工金、昭43 院修金、昭43 院博金)

金属を科学し、次世代材料の熱加工を目指しています。顧客の材料ニーズである機能性を追求した材料設計の段階から新材料をデザインし、顧客の生産技術に寄与できるように努力しています。

熱処理加工のパイオニアとして、常に、浸炭焼入れ・焼き戻し処理および窒化処理など表面改質技術の追求、設備の充実を図っています。さらに新しい材料加工法である MIM(Metal Injection Molding)による焼結部品製造技術を展開しています。



寺内氏

(2) 株式会社 紀和マシナリー 代表取締役会長 紀和 隆 (昭39 学工機)

工作機械の生産・販売を通して社会に貢献する企業を目標に、顧客の多岐にわたる機械加工に役に立ちたいと日々努力しています。工作機械に求められる機能は常に変化し発展を続けており、そのスピードもますます加速しています。

主力製品である立型マシニングセンタは、多種多様なワークに対応が可能であり、自由に選べるワークエリアの形態は顧客のニーズに合う多目的マシンであり、また治具・円テーブルの取り付けが容易でワークの高効率加工を実現しています。



紀和氏

(3) 八田工業株式会社 代表取締役社長 隅谷 哲三 (昭39 学工金)、技術顧問 八木 勲 (昭40 学工金)



隅谷氏



八木氏

グローバルな発想を基本に、テクノロジーを育てていきたい。熱処理加工・金属加工のニーズも、高度に、多彩になってきています。そんな動きをシャープにとらえ、最先端の設備と管理システム、そして技術力の強化をいち早く徹底しています。

クリーンで安全な真空熱処理加工

技術、後加工の不要なイオン窒化処理技術に加えて高精度なワイヤー放電加工技術で顧客ニーズに応えています。ワイヤー放電加工技術は、金型、部品の品質の向上につながる安定加工を実現しています。

天神祭にて奉納船に乗船 7月25日(金)

天神祭のフィナーレを飾る船渡御、奉納船鳳講の船に機構研究員・会員の20名が乗船し、振興会の揃いの法被を着て天神祭を堪能しました。70年振りに解体修理された鳳神輿は黄金色が一層際立ち、鳳講は御霊を祀る講の一つで格式が高く、乗船できるのは限られた方となります。

川面に揺れる篝火とともに5千発の花火により、夜空を彩る大川の船旅を楽しみました。

船と船がすれ違うたび、「大阪じめ」で祭り気分は盛り上がり、校友会の「関大丸」とは更に熱を込め、最高潮に。



第2回海外研究会が無事終了；速報 8月18日(月)～22日(金)

＝チュラロンコン大学石油・石油化学研究科と関西大学工学研究科との合同シンポジウム参加＝

一昨年における当会初の海外研究会；上海・バンコク訪問研究会に端を発し、昨年の関西大学にお招きしての理工学国際シンポジウムに続き、この度の標記シンポジウムに当会として後援し、会長・副会長・杉本隆史教授（産学官連携・知財センター長）ご夫妻を始め、多数参加しましたのは大変意義深いものがありました。

シンポジウムには当会として、会員企業10社の会社紹介のパネルを出展しました。パネルは会場正面左右に展示され、シンポジウムを盛り上げる事が出来ました。

田村 裕シンポジウム実行委員長（化学生命工学部教授）による目的の一つに、「特に今回は大学院生を15名参加させることで、国際的な若手の育成への一助となるものと思われます。」のが大きな特徴で、準研究員としての大学院生や指導教員の方々、チュラロンコン大学および国立金属材料研究所（MTEC）の方々との交流を一層深め、また当地での3社の訪問・視察を通じ、そして地元企業在籍の校友会の会・「泰国千里会」の方々との交流により、企業のアジア戦略の今を学び、大きな成果を上げることが出来ました。



ASCIKU 関西大学科学技術振興会

Associative Society for the Collaboration between Industries and Kansai University